

# 『古川ロッパ昭和日記』の「とても」「断然」「てんで」「絶対」：否定呼応と言われた副詞の使用実態

著者	梅林 博人
雑誌名	近現代日本語における新語・新用法の研究
ページ	22-37
発行年	2014-03-28
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；13-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002746">http://doi.org/10.15084/00002746</a>

## 1 はじめに

戦前の「全然+肯定」（例「全然新しい世界」芥川『河童』第九節、昭2）を知る人々は、戦後、「下に必ず打ち消しを伴なう」（三省堂『辞海』昭27）という語史と一致しない規範のもとで、副詞「全然」をどのように用いていたのであろうか。

こうした疑問と、先行研究では個人の経年的な用法調査が手薄であるという理由から、筆者は、梅林（2012.10）で『古川ロッパ昭和日記』（戦前篇、戦中篇、戦後篇、晩年篇。2007年新装復刊、晶文社）の「全然」の使用実態を調査し、結論として、ロッパの場合には「全然」の使用に際して遲疑逡巡や規範への追従も在った可能性が高いことを述べた。

しかし、従来、「下に必ず打消を伴なう」といった規範意識によって物議を醸した副詞は、「全然」のみではない。たとえば、「とても」は、「全然」よりも早い時期に否定呼応があいまいになった類例として度々引き合いに出されている。また、「断然」「てんで」「絶対」なども、「全然」と似た時期にやはり否定呼応があいまいになっていたという言及がなされている（言及については後掲する）。

そして、ここでも気になるのが、否定呼応のあいまい化を感じた人々は、当時それぞれの副詞をどのように用いていたのかという点である。物議の以前と以後で用い方を変えたのかどうか、否定呼応の「否定」にどのような語句を用いたのか、呼応のあいまい化によって肯定呼応が圧倒的に多くなってしまったのか等々、具体的な使用実態はどのようなものであったのだろうか。

このように考えてみると、副詞の呼応についての言及は、どのような使用状況を反映しているのかが明らかではないと気づかされ、ことによると、自身や他人の印象論を妄信しているのではないかと反省もさせられる。

そこで、今回、従来の言及で「全然」と共に引き合いに出されることのある「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態を『古川ロッパ昭和日記』で調査し、その結果を梅林（2012.10）でやはり同日記を用いて調査した「全然」の使用実態と比較して、それぞれの副詞について気づく点を述べてみることにしたい。

## 2 副詞の呼応に関する諸言及

前章で述べたように、まず、「とても」「断然」「てんで」「絶対」が、従来どのように記されているのかを諸言及であらためて確認してみたい。

### 2-1 浅野信の言及

副詞に関する浅野信（1905～1984〈明38～昭59〉）の言及はいくつかあり、それについて

ては、新野（2013）、新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）に詳しい。ここでは、「断然」についての早い時期の記述である浅野（1933〈昭8〉）と、「“全然”の呼応に関する意識が直接示された嚆矢であり」（新野2013、6頁）、「とても」「断然」についてもふれている浅野（1943〈昭18〉）を取り上げる。

①断然……元来否定的語、それが肯定的になった。しかもかなり頹乱性をもつてゐる。  
（浅野（1933）160頁）

②「とても」が余りにその一語に感情の凝集が甚だしかつたために、その呼応性を振り棄てたのと反対に「決して」が下に否定の語を呼応せしめるに至つたことは面白い現象である。（中略）今日これらの中間にあるものが「全然」であり「断然」である。これらは、前記語の否定語に対して、半ば消極語をも取るのである。（浅野（1943）40～41頁）

## 2-2 小堀杏奴の言及

小堀杏奴（1909～1998〈明42～平10〉）の言及については、戦後発生 of 流行語「全然+肯定」への非難が直接示された嚆矢と目される小堀（1953〈昭28〉）を取り上げる。なお、文中の「女学校時代」は大正末期～昭和初期と考えられる。

③近頃気になるのはよく、／「全然よく出来るの。」／式の言葉を使ふ事である。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味をなさない。／考えてみると、私が女学校時代「とても」と云ふ言葉が流行し、「とても綺麗」などと今でも平気で使ふが、「とても」は考えると否定の意味である。／こんな事では「とても駄目」だ。

## 2-3 『言語生活』の座談会における言及

『言語生活』には前出③や後出⑤を含め様々な情報が載るが、ここでは、1953年の座談会を取り上げる。

④浅沼 「断然」なんて言葉は、その次に否定の言葉がくるのが普通でしょう。／丸野 普通はそうでしょう。／浅沼 ところが「断然やる」とか……。／編集部 「全然」というのが、今は肯定になっておるでしょう。／堀川 「まるでおもしろい」もそうですね。（座談会「マス・コミュニケーションと日本語」『言語生活』21、1953年6月号。＊丸野（不二男）＝毎日新聞社紙面審査室／浅沼（博）＝日本放送協会報道局取材部長）

なお、③④⑤はいずれも昭和28年の発信であるが、その時期は戦後の「コトバ・ブーム」のただ中にあたる。「この時期のコトバ・ブームの背景には、相次いで強行された、当用漢字・現代仮名遣いや、アメリカ英語の氾濫など、身近なところで、コトバの状況が急激に変化したことがある。その困惑ないしは混乱に、専門的な説明が求められた」（田中（2007）まえがき）という時代背景は承知しておいてよいことかと思われる。

## 2-4 岩淵悦太郎の言及

岩淵悦太郎（1905～1978〈明38～昭53〉）の言及については、「てんで」にふれる岩淵（1953〈昭28〉）と、「とても」についてやや詳しく触れる岩淵（1959〈昭34〉）を取り上げる。

⑤「てんで好きだ」「てんでいい」のような「てんで」の用法、「全然好きだ」「全然いい」のような「全然」の用法、なかなか意表に出た表現が少ないが、大体において、流行語は、名前通り一時の流行に過ぎず、生命力ははかないようである。（岩淵（1953））

⑥私自身の記憶から言っても、大正期には、少なくとも若い年齢層では、この「とても」の用法（肯定呼応の用法—引用者補）はもうあたりまえになっていたのではないかと思われる。というのは、私は、小学校・中学校・高等学校を大正期に過したのであるが、「とても」のこの用法を特に耳新しいものと感じた記憶はない。幼い時からずっと使っていたような感じを、この「とても」の用法に対して持っている。少しも「とても」のこの用法を怪んだ記憶がないのである。（中略）／戦争後に気の付いたことであるが、若い層で、しきりに／てんでおもしろい。／全然うれしい。／のような言いかたをする。この「てんで」「全然」は、言うまでもなく／てんで出来ない。／てんで見向きもしない。／全然知らない。／全然興味がない。／のように、否定表現を伴うのが普通である。それを肯定表現に使うのであるから、これはちょうど、「とても」の場合と同じといってよい。（岩淵（1959））

## 2-5 田中章夫の言及

他の副詞とは異なり、「絶対」が「全然」と関わって取り上げられることは少なく、筆者自身も、戦中や戦後まもない時期の言及については見出せていない。しかしながら、最近の田中（2012〈平24〉）に次のような興味深い言及が見られる。

⑦（「全然～肯定形」「とても～肯定形」をあげた—補引用者）ついでに、もう一つ。昭和の二〇年代のことだが、教室の黒板の端に「〇〇部員は、昼休み、絶対に部室に集合せよ」と書いてあるのをご覧になった、文法学の岩井良雄先生が、「この“絶対に”はオカシイ」と指摘なさった。いうまでもなく、「絶対に」なら「集合するな」でなくてはオカシイというわけだ。当時、学生たちの意見は、オカシイ／オカシクナイ、半々だったように記憶する。現在では「絶対に見に行く」にも「絶対に賛成しよう」にも、あまり違和感を感じられないが、こうした用法のハシリは、どうも終戦直後の若い世代だったのではないかと思うが、どうだろうか。（188頁）

また、同じく最近の工藤（2013）も、「全然」の肯定呼応、否定呼応の論述に続けて「このたぐいの語は、ほかにも「多分」「一向に」「絶対」などがある。漢語由来の副詞にはこの傾向が強い。」と「絶対」をあげている。こうしたことから、今回、「絶対」も調査対象語に加えることとした。

## 2-6 副詞の呼応に関する言及の略年表

副詞の呼応に関する言及は、上記以外にもあり、稿末に示す先行研究にはその情報が記されている。そこで、それらをここに「副詞の呼応に関する言及の略年表」の形に整理してみることにする。

### 副詞の呼応に関する言及の略年表

年次	【言及対象の語】	資料名
1923(大12)	【とても】	坪内逍遙『所謂漢字節減案の分析的批判』
1924(大13)	【とても】	芥川龍之介『澄江堂雑記』
1927(昭2)	【とても】	新村出「山言葉」『京都帝大新聞』(7/1)「とても補講」『藝文』(10月)
1933(昭8)	【断然】	浅野信『巷間の言語省察』
1935(昭10)	【断然・旧全然】	浅野信『国語の匂ひと韻』
1935(昭10)	【断然】	萩原朔太郎「新しい言葉は何処にあるか 日本語の未来」『作品』6-10
1937(昭12)	【とても】	里見弴『文章の話』
1943(昭18)	【とても・決して・断然・旧全然】	浅野信『俗語の考察』
1947(昭22)	【断然】	塩田まさる『恋愛モダン語隠語辞典』
《(昭25)	坂口安吾『安吾巷談』用例「全然エライよ」等。獅子文六『自由学校』用例「全然肉体派ね」等》	
1953(昭28)	【全然・とても】	小堀杏奴「思ひ出」『言語生活』18
1953(昭28)	【断然・全然・まるで】	座談会「マスコミュニケーションと日本語」『言語生活』21
1953(昭28)	【てんで・全然】	岩淵悦太郎「言語時評—流行語」『言語生活』27
1959(昭34)	【とても・てんで・全然】	岩淵悦太郎「ことばの変化」『世界』165

＊播磨（1993）、吉井（1993）、梅林（1995）、同（2000）、新野（1997）、同（2011）、新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）を参考として作成。

＊本表は、新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）の発表当日資料を加筆修正したものである。

## 2-7 副詞の呼応に関する諸言及のまとめ

これまでのところからは、次のようなことが推察されよう。

(イ) 梅林（2000）などで「全然+肯定」批判が目立ち始めたのは昭和20年代後半であることを示したが、その時期にはすでに「とても」は否定呼応ではないと意識されている。

(ロ) 新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）で橋本氏は「断然」の受容の詳細を示し、呼応のあいまい化に関する言及についても、「▲古くは昭和初期から例が見られる。」（222頁）と指摘したが、その情報と上記略年表とを併せて考えると、「断然」は、「と

ても」よりも後、「全然」よりも前の時期に否定呼応のあいまい化を生じた考えられる。

(ハ)「てんで」「絶対」については情報が少ないが、逆に見れば、両副詞とも戦前の様子を語るものがないことから(略年表)、「てんで」「絶対」の否定呼応のあいまい化は「全然」とほぼ同時期、戦後のことなのではないかと推察される。

さらに(イ)～(ハ)を総じて言えば、呼応の副詞における否定呼応のあいまい化は、大正半ば～昭和20年代の50年に満たない期間に【「とても」―「断然」―「全然／てんで／絶対」】の順で時間差的に次々と発生した可能性があるということになる(時間差的発生は、「差」が短ければ、連続的、さらには同時並行的になるということでもある)。

したがって、この期間のどの時点に注目して否定呼応のあいまい化を語るかによって、内容が違って来る。たとえば、昭和戦前で語れば、「とても」はかつて否定呼応であった、「断然」は最近呼応が乱れている、「全然」は否定呼応するのが普通である」となるであろうし、昭和戦後で語れば、「とても」「断然」はかつて否定呼応であった、「全然」は最近呼応が乱れている」となるであろう。

そう考えると、おのずと次の(i)(ii)が考えられてくる。

(i) 大正期～昭和30年代(先の⑥言及が昭和34年であることを考慮)においては各副詞の呼応の実態は数年の単位で刻々と変化している可能性がある。したがって、その時期の使用実態調査が必要となる。

(ii) 比較的速いとも思われる変化に、個々人はどのように対応して各副詞を用いていたのか。困惑はなかったのか。それを見るためには個人の経年的な用法調査が必要となる。

今回、こうした(i)(ii)から、『古川ロッパ昭和日記』の「とても」「断然」「てんで」「絶対」について調査を行った。その結果と考察を以下に記すが、それに先だって、次章では古川ロッパの略歴と『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性について確認しておくことにしたい。

### 3 古川ロッパの略歴および『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性

#### 3-1 古川ロッパの略歴

古川ロッパの略歴は以下の通りである。

喜劇俳優。本名郁郎。東京都出身。映画雑誌の記者から俳優に転じ、ロッパ一座を結成してエノケン(榎本健一)と並ぶ人気者となった。脚本、随筆など著作も多い。

明治三六～昭和三六年(一九〇三～六一)。(小学館『日本国語大辞典 第二版』)

ここで注目すべきことは、ロッパの生年が前出の浅野氏(1905～1984)、小堀氏(1909～1998)、岩淵氏(1905～1978)と近く、四人はほぼ同世代であるという点である。したがって、ロッパも三人と同様に戦後のさまざまな流行語にふれていたと考えられる。



また、「俳優」「記者」「著作も多い」などの経歴から言語に対する意識の高いことも容易に想像される。事実、『古川ロッパ昭和日記』には発音や文法、言葉遣い、流行語等に関する記述が散見する。その詳細は梅林（2012.10）で記したので、ここでは割愛する。

### 3-2 『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性

次に、『古川ロッパ昭和日記』（著者：古川ロッパ、監修者：滝大作、全四巻、2007年新装復刊、晶文社）の研究資料としての適性を見るが、まず、日記各巻の時期と分量を以下に記す。

- ・戦前篇：昭和9-15年 日記頁量794頁（昭和10年の日記が欠損）
- ・戦中篇：昭和16-20年 日記頁量887頁
- ・戦後篇：昭和20-27年 日記頁量918頁
- ・晩年篇：昭和28-35年 日記頁量908頁

いずれの巻もA5判二段組みの体裁となっている。こうした配分とロッパ自身が記した日記の全分量との関係については、監修者の滝大作が次のように述べている。

全体の量は、お二人の試算によると、四百字原稿用紙で優に三万枚を越えるという。／これを丸ごと出版すると、A5判、二段組み五百ページの本がおおよそ二十冊になる。常識的に考えて、相当読書好きの方でも容易に読み切れる分量ではない。／相談の結果、清氏の了解を得て、凡例に示した原則によって、（引用者中略）三分冊にまとめることになった（「戦前篇」「解説」806頁。文中の「お二人」は晶文社の津野海太郎氏、村上鏡子氏。「清氏」はロッパの長男古川清氏）

また、「戦後篇」の「解説」（929～932頁）には、最終的に上記の全四巻となったいきさつが記されている。

こうした体裁をふまえたうえで、『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性を考えてみるならば、まず、同日記が言語量の面から見て十分なものであることは明らかである。そして、これに小学館『日本国語大辞典 第二版』の用例採取資料であるという実績を加味すると、今回の調査資料として、同日記は適切であると考えられる。

## 4 調査方法および調査結果の提示

今回の調査では、機械検索と素読による用例確認を併用した（注1）。そして、採集された用例を、新野（2011）の第2部第3章に載る表1～4の分類項目にしたがって用法分類し、その結果を、【図表1A、1B】【図表2A、2B】【図表3A、3B】【図表4A、4B】にまとめた。また、比較のために、以前に調査した同日記の「全然」の使用実態を示す図表を【図表5A、5B】として添えた。

なお、本稿では、新野氏の分類が先行研究中でもっとも詳細と考えられることから、氏の分類を踏襲した。また、今回は機械検索による調査も利用したわけであるが、用法の解釈、判定のために、『日記』については広範に目を通したことを付言しておく。





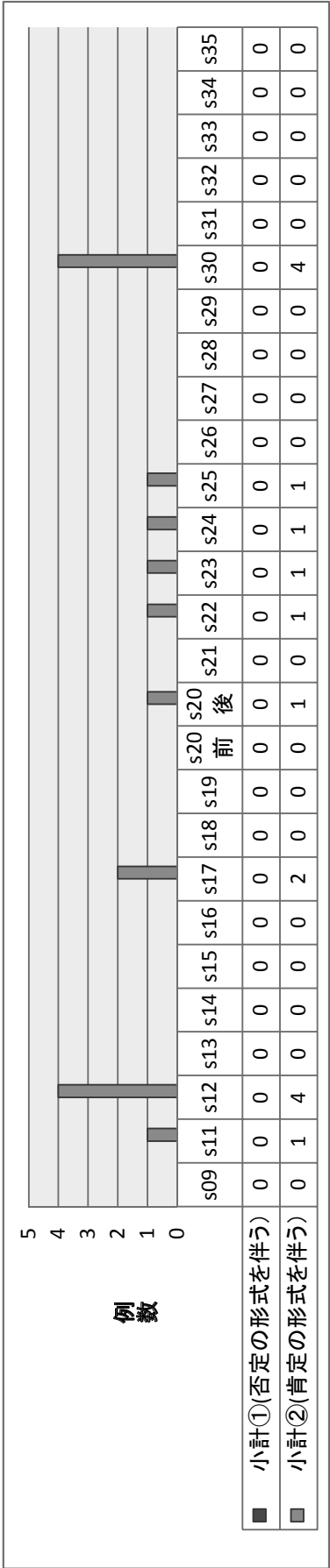
【図表2A】『古川ロッパ昭和日記』の「断然」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計
①肯定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
	助動詞「ナイ」「ズ」	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
	小計①	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
	A否定の意の接頭辞を含む語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
②肯定の形式を伴う	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
	C否定的な意味の語	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4例( 23.53%)
	Dマイナスの価値評価を表す語	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例( 11.76%)
	E否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	10例( 58.82%)
③その他	小計②	0	1	4	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	16例( 94.12%)
	呼応部分の省略	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)
	連体(「ーたる」)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 5.88%)
	小計③	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 5.88%)
	計(小計①+②+③)	0	1	5	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	17例( 100.00%)

\*数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」「s20後」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

\*分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表2B】否定の形式を伴う「断然」と肯定の形式を伴う「断然」の年代別使用状況（表2Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化）



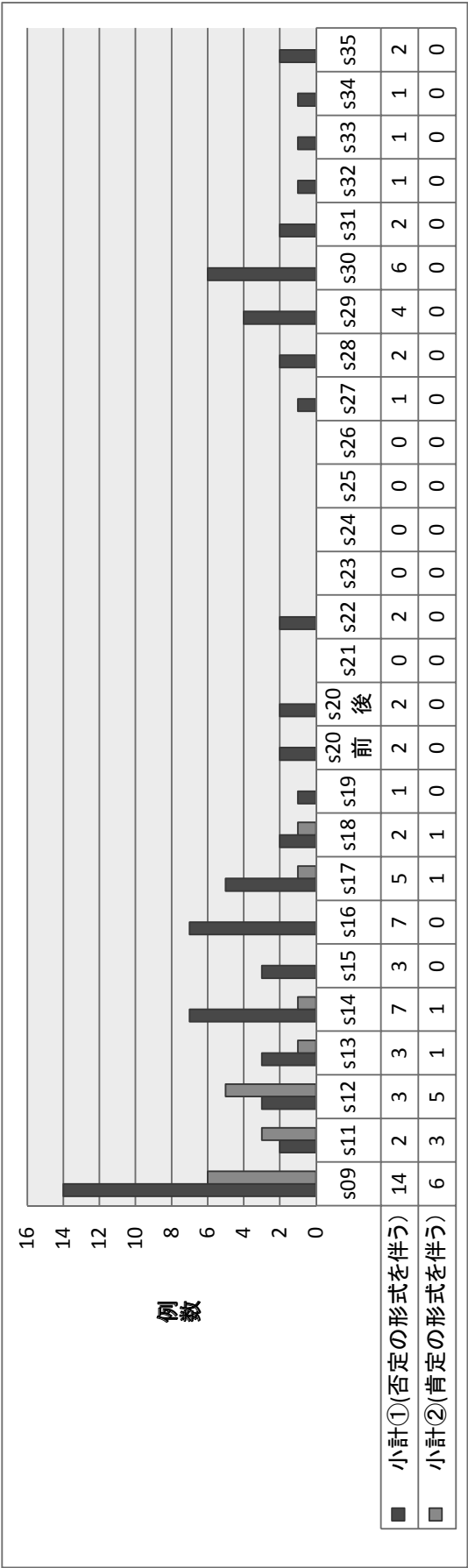
【図表3A】『古川ロッパ昭和日記』の「てんで」の使用実態

分類	年代																											計
	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」																											8例( 8.79%)
	助動詞「ナイ」「ズ」																											65例( 71.43%)
	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	1
② 肯定の形式を伴う	13	2	3	2	7	3	6	4	2	1	2	2	0	2	0	0	0	0	1	2	3	4	2	1	1	1	1	1
	小計①																											73例( 80.22%)
	A否定の意の接頭辞を含む語																											0例( 0%)
	B二つ以上の物事の差異を表す語																											0例( 0%)
	C否定的な意味の語																											0例( 0%)
	Dマイナスの価値評価を表す語																											18例( 19.78%)
③ その他	6	3	5	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	E否定的意味やマイナス評価でない語																											0例( 0%)
	小計②																											18例( 19.78%)
	呼応部分の省略																											0例( 0%)
③ その他	連体(「ーの～」)																											0例( 0%)
	小計③																											0例( 0%)
	計 (小計①+②+③)																											91例(100.00%)

\* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

\* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表3B】否定の形式を伴う「てんで」と肯定の形式を伴う「てんで」の年代別使用状況 (表3Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化)



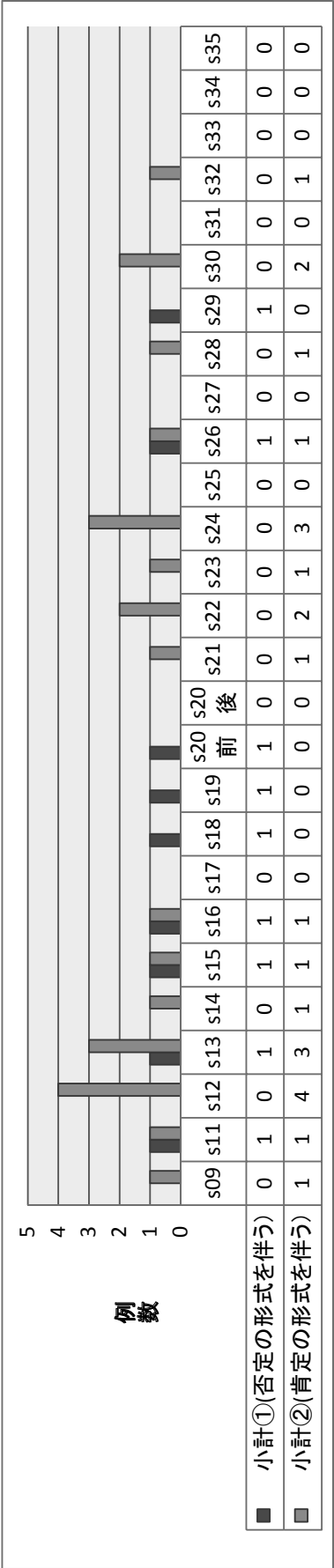
【図表4A】『古川ロッパ昭和日記』の「絶対」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 1.82%)	
	助動詞「ナイ」「ズ」	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7例( 12.73%)	
	助詞「ナ」(禁止)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 1.82%)	
	小計①	0	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	9例( 16.36%)	
② 肯定の形式を伴う	A否定の意の接頭辞を含む語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)	
	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)	
	C否定的な意味の語	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5例( 9.09%)	
	Dマイナスの価値評価を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例( 0.00%)	
	E否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	3	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	2	0	1	0	0	19例( 34.55%)
③ その他	小計②	1	1	4	3	1	1	1	0	0	0	0	0	1	2	1	3	0	1	0	1	0	2	0	1	0	0	0	24例( 43.64%)
	呼応部分の省略、述語用法	0	0	0	2	1	1	4	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	13例( 23.66%)	
	連体(「ーの～」 「ーな・なる」)	1	0	1	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9例( 16.36%)	
	小計③	1	0	1	4	3	2	5	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	22例( 40.00%)
	計 (小計①+②+③)	2	2	5	8	4	4	7	0	2	2	2	0	1	2	1	3	0	2	0	1	1	3	1	1	0	0	1	55例( 100.00%)

\* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

\* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表4B】 否定の形式を伴う「絶対」と肯定の形式を伴う「絶対」の年代別使用状況 (図表4Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化)

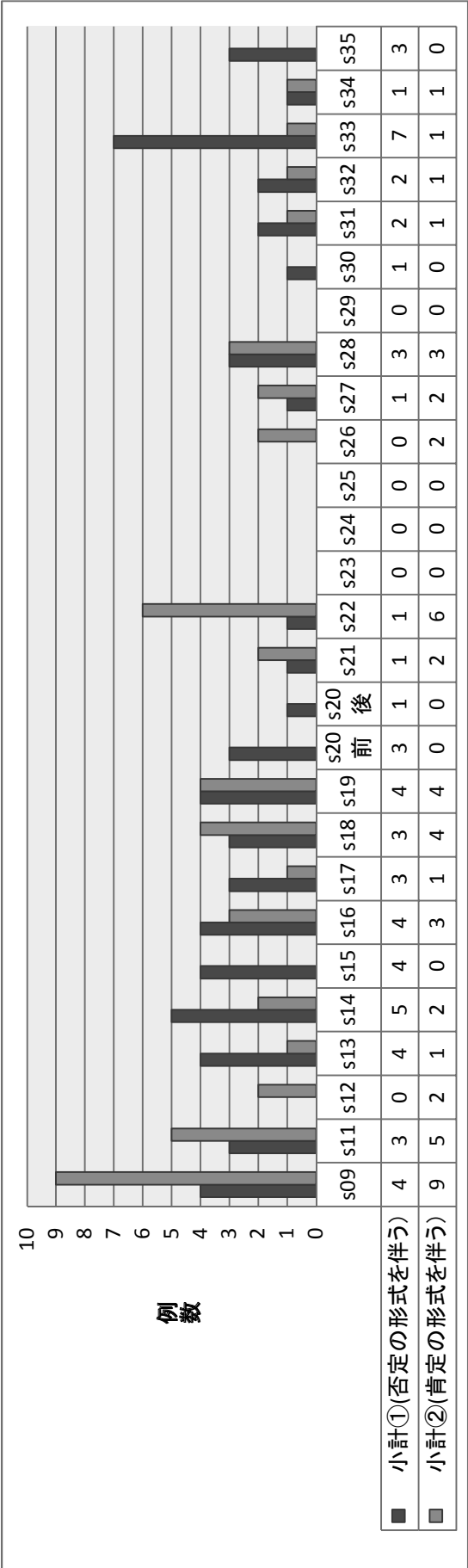


【図表5A】『古川ロッパ昭和日記』の「全然」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計
		s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	1	0	0	1	4	0	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	2	0	0	18例( 16.07%)
	助動詞「ナイ」「ズ」	3	3	0	3	1	4	4	1	2	2	2	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0	1	1	1	5	1	3	42例( 37.50%)
	小計①	4	3	0	4	5	4	4	3	3	4	3	1	1	1	0	0	0	0	1	3	0	1	2	2	7	1	3	60例( 53.57%)
② 肯定の形式を伴う	A否定の意の接頭辞を含む語	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4例( 3.57%)
	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5例( 4.46%)
	C否定的な意味の語	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4例( 3.57%)
	Dマイナスの価値評価を表す語	8	3	0	1	1	0	1	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0	23例( 20.54%)
	E否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	2	0	1	0	1	0	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	14例( 12.50%)
③ その他	小計②	9	5	2	1	2	0	3	1	4	4	0	0	2	6	0	0	0	2	2	3	0	1	1	1	1	1	0	50例( 44.64%)
	呼応部分の省略	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 0.89%)
	連体(「ーの～」)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例( 0.89%)
	小計③	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例( 1.79%)
	計(小計①+②+③)	13	8	2	5	7	4	8	4	7	9	3	1	3	7	0	0	0	2	3	6	0	1	3	3	8	2	3	112例(100.00%)

\* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」「s20後」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。  
\* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表5B】否定の形式を伴う「全然」と肯定の形式を伴う「全然」の年代別使用状況（表5Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化）



## 5 調査結果についての考察

### 5-1 「とても」について

岩淵（1959、先掲⑥）は、大正期には「とても+肯定」が「もうあたりまえになっていたのではないと思われる」と述べるが、ロッパの使用実態もそれを示していると考えられる。【図表 1 B】を見ると昭和 9～35年に渡って、肯定呼応、否定呼応を併用しており、特に否定呼応を意識している様子うかがわれぬ。一個人の使用実態であることを考慮して慎重を期す場合には、少なくともロッパは、「とても」を否定呼応の副詞とは捉えていないということになる。そして、岩淵とロッパの見解を支えに明言するならば、昭和においては「とても」は否定呼応と意識されていないとなる。

しかし、「とても+肯定」が圧倒的なのかとなるとそうとまでは言えない。肯定呼応：否定呼応＝約 6：4 である（【図表 1 A】で否定呼応は約 42%〈小計②右端〉、肯定呼応は約 56%〈小計②右端〉）。「とても」は確かに肯定呼応もするが、いっぽうで、否定呼応もまだ 4 割強見られる、つまり、厳密には、「とても」は肯定呼応もするようになり、その頻度が増したと言うべきである。

従来は、この点への言及が不足していたと言える。たとえば、小堀（1953、先掲③）は、「とても綺麗」などと今でも平気で使ふ」と言うが、そのような肯定呼応を圧倒的な比率で使うようになったのか、五分五分程度に使うようになったのか、それともそれ以下なのか、それがまったく分からなかったわけである。

また、ここで、具体的に 6：4 という数字が出たわけであるが、これは、人が、どの程度の使用率で主流、非主流を感じるのかといったことの目安にもなろう。4 割は少ないとは言にくい微妙な数字だけに、この数値は判断の際の拠り所になりそうである。

### 5-2 「断然」について

『言語生活』1953年の座談会（先掲④）は「断然」は「その次に否定の言葉がくるのが普通」とするが、ことロッパに関しては、これはまったくあてはまらない。17 例中、連体用法（「断然たる」）1 例を除く 16 例が否定呼応ではない。用例の一部を示す。

⑧ スープは断然ホテルよりよし。（昭和11年5月21日）

⑨ 幸にも淋しさを知らぬ家庭あり、断然帰った。（昭和12年1月29日）

⑩ 僕らの分が断然いゝ。（昭和12年5月14日）

⑪ 「ロッパ戦はゞ」のみは断然受ける（昭和12年11月14日）

⑧～⑪以外の用例の呼応部分を記すと、「食はれてゐる」「一位」「ことはって」「第一（2例）」「ことはる」「引きはなす」「やられつゞけて」「うまかった」「続けてゐる」「禁煙に入らう」「禁煙するさうだ」となっている。

たとえば、「やられつゞけて」は否定的内容であると見て、座談会の「否定の言葉がくるのが普通」を擁護することもできるが、そうした解釈には苦しさを感じる。

むしろ、【図表 2 A、2 B】のロッパの使用実態、浅野（1933、先掲①）、2-6で示した「副詞の呼応に関する言及の略年表」等の資料から、「断然」の否定呼応のあいまい化は、昭和戦前の段階でかなり進んでおり、座談会の行われた戦後では、もはや否定呼応は「普通」ではなくなっていると考えerほうが素直である。座談会の言及は実態を反映しているというよりも印象論に陥っていると言えはしないだろうか。

また、ロッパの使用実態でもう一つ目立つのは、「断然」では肯定呼応の使用率が圧倒的になっている点である。「とても」は肯定呼応が約6割であったが、「断然」はそれを遥かにしのいでいる( $16 \div 17 \times 100 = 94.12\%$ )。個人の実態とはいえ、否定呼応がこれほどまでにあいまい化(というよりも衰退)する過程はどのようなものであろうか。この探究には、今度は複数の話者の使用実態をみる必要があるゆえ、今後の課題である。

### 5-3 「てんで」について

岩淵（1959、先掲⑥）は、「てんで」は「否定表現を伴うのが普通」と述べる。ロッパの使用実態も否定呼応が約80%（【図表 3 A】小計①右端欄）となっていて、それにたがわぬ様相を示している。先の5-1で6割という数値が一つの目安になりそうであることを見たが、ここでは8割であるから、⑥の言及とロッパの実態はまさに一致していると言えよう。

また、岩淵（1953、先掲⑤）では、「てんで+肯定」について、その「生命力ははかない」と述べるが、この様相もロッパの使用実態に現れている。【図 3 B】のグラフを見ると、戦前の昭和9、11、12年にかけて6例、3例、5例と存在した「てんで+肯定」は、以後、数を減じ、戦後には皆無となる。「生命力ははかない」の言葉そのものである。

このように、「てんで」の呼応の様子は岩淵の言及にあてはまるものばかりである。が、しかし、その状況に懸念がないわけではない。

【図 3 B】に見られる昭和20年代の空白と戦後の「てんで+否定」一辺倒の使用状況は、いわば、出来過ぎている印象がある。そして、空白期間が、先の2-3であげた戦後の「コトバブーム」と一致することを考慮すると、戦後の「てんで+否定」は、「否定表現を伴うのが普通」という世論に追従し、自らの用法を矯正した可能性があるのではないかという懸念も生じてくるのである。

というのも、昭和20年代に使用が一時的に見られなくなるという現象は、じつは「全然」にも見られるのである（【図表 5 B】の昭和20年代の空白を参照）。梅林（2012.10）では、この時期を「混乱困惑期」と名づけ、言語主体に遲疑逡巡があつた時期ではないかと述べた。「てんで」の【図表 3 B】と「全然」の【図表 5 B】を見比べてみると、昭和20年代の前半に空白期間があり、その後、否定呼応が増えるという様子が似ているように見えることから、「てんで」の場合にも同様に迷いがあり、それを経て用法の矯正をしたのではないかと考えられもするのである。

そして、もしそうであるならば、こと副詞の呼応に関しては、言語形成期を含む若年期



に身につけた用法を矯正する可能性があるということになり、それはたいへん興味深いことと考えられる。我々は、出身地や言語形成期の居住地によって言葉遣いを判断することがあるが、それについても注意が必要ということになるかも知れない。

これについての検討もやはりさらに資料が必要であることから、ここでは保留とする。

#### 5-4 「絶対」について

「絶対」は、他の副詞と異なって言及が少ないのであるが、ロッパの使用実態でも、他の副詞と様相が異なっている。

まず、【図表4A】を見ると、他の副詞に比べ、連体用法と呼応部分の省略用法（又は述語用法、「～は絶対（だ）。」の類）が目立つ。次に【図表4B】を見ると、否定呼応が目立つとは言い難く、さりとて、肯定呼応に偏っているかとなると、その明言も躊躇する。肯定呼応率も約43%と微妙な数字である（小計②右端欄）。

以上をまとめてみると、「絶対」は、まず呼応の副詞なのかどうかという点から確認してみる必要がある。事例も必要であるが、それと併せて、辞書、文法書などの確認が必要である。

### 6 おわりに

冒頭および2-7の（i）（ii）で示したような動機から、呼応の副詞が引き起こす否定呼応のあいまい化についての言及を整理し、また、『古川ロッパ昭和日記』を資料としてロッパ個人の「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態を調査・考察した。その結果、以下の具体的な内容を示すことになったと思われる。

○呼応の副詞における否定呼応のあいまい化は、大正半ば～昭和20年代の50年に満たない期間に【「とても」―「断然」―「全然／てんで／絶対」】の順で時間差的に次々と発生した可能性があるということになる（時間差的発生は、「差」が短ければ、連続的、さらには同時並行的になるということでもある）。(2-7)

○『古川ロッパ昭和日記』の言語資料としての有用性

○ロッパ個人の「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態（図表及び5章）

しかしながら、その一方で、「副詞Xは以前は否定呼応であったが、最近では呼応があいまいとなり肯定呼応となっている」といった素朴な言及に潜む多くの問題を、課題として残してしまいもした。「以前」「最近」とはいつなのか、「否定」「肯定」に当たる表現は具体的に何か（副詞によりそれらが異なっている様子も垣間見える）、あいまい化の過程や速度はどのようなものであるのか、あいまい化の原因は何か、あいまい化に際して人はなぜ過去の用法を忘れるのか等。

残る課題は多いが、ただ、今回、複数の副詞の使用実態を見たことで、こうした課題に向き合うに当たっては、一つの副詞に執着し過ぎないことが必要であるように思われた。否定呼応のあいまい化は、「全然」ばかりにではなく、いくつかの副詞に時間差をもって

生じている。その点に注目し、呼応の副詞群における変化という見方をすることによって問題を整理することができるのではないかとも思われた。今後につなげたい。

#### 【注】

(1) 調査に関しては橋本行洋氏（花園大学）にご教示いただいた。記してお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- 浅野信（1933）『巷間の言語省察』中文館書店
- 浅野信（1943）『俗語の考察』三省堂
- 岩淵悦太郎（1953）「言語時評—流行語」『言語生活』27 筑摩書房
- 岩淵悦太郎（1959）「ことばの変化」『世界』165 岩波書店
- 梅林博人（1995）「全然の用法に関する規範意識について」『人文学報』266 東京都立大学人文学部
- 梅林博人（2000）「流行語批判とその背景—「全然」の場合について—」『相模国文』27 相模女子大学国文研究会
- 梅林博人（2012.3）「「全然」再考—迷信、アプレ、前提の否定など—」『相模国文』39 相模女子大学国文研究会
- 梅林博人（2012.10）「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態—」『表現研究』第96号 表現学会
- 工藤力男（2013）「陳述のゆくえ—辞苑閑話・三—」『成城文藝』225 成城大学文芸学部
- 小堀杏奴（1953）「思ひ出」『言語生活』18 昭28.3 筑摩書房
- 田中章夫（2007）『揺れ動くニホン語』 東京堂出版
- 田中章夫（2012）『日本語雑記帳』 岩波書店
- 中尾比早子（2005）「副詞「とても」について—陳述副詞から程度副詞への変遷—」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 新野直哉（1997）「「全然＋肯定」について」佐藤喜代治編『国語論究6—近代語の研究』明治書院
- 新野直哉（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』第2部「「全然」＋肯定」をめぐる研究」ひつじ書房
- 新野直哉（2013）「「全然」に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和10年代を中心に—」『表現研究』第97号 表現学会
- 新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』日本語学会

播磨桂子（1993）「「とても」「全然」などに見られる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究』第75号 九州大学国語国文学会  
吉井健（1993）「国語副詞の史的研究—『とても』の語史—」『文林』27号 神戸松蔭女子学院大学 濱田敦ほか（2003）『国語副詞の史的研究 増補版』所収。後者使用。

#### 【付記】

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト第7回研究発表会発表資料《梅林博人（2013）「否定呼応と言われた副詞の実態—古川ロッパの「とても」「てんで」を中心に—」2013年6月23日、於相模原ユニコムプラザ》と、新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』によるブース発表で当日示した資料（文責梅林）とをもとにして、あらたに稿を成したものである。各発表でのご教示にお礼を申し上げる。